



## Topanga Canyon の風

1960年代末、ビートニクスにあこがれてアメリカへ渡った写真家・小林昭。全米を放浪しながら、旅先で出会った人々や風景を白黒フィルムに焼き付けてきた。一人の青年を、旅へかき立てたモノとは何だろうか？

小林昭◎文・写真  
Text & Photos: Akira Kobayashi

僕がラルフに出会ったのはヴェニスビーチだった。スピードウェイという名のついた路地裏の安アパートに落ち着いてそんなたっていないときの夏の終わりだった。

砂浜に寄せては返す波のように夏の人々の去ったオーシャンフロントウォークを行き交うローカルの人々も穏やかな笑顔を取り戻していた。僕はその日もいつものようにカメラを片手にバーバラの家の方にブラブラと歩く。彼女の家のドアを開けると小汚い身なりの若い裸足の男が聞き覚えのあるブルースのフレーズを弾きながらバーバラのギターをチューニングしている。「バーバラは居ないの？」と聞くと、すぐ戻ると言って出て行ったと言う。「僕はバーバラの友達」と言う。彼は「僕はラルフ。バーバラの弟」あっそう、よろしく。そういえばバーバラに弟がいるということを知っていたのを思い出す。「あなた、

何しているの？」と聞くと彼はギターをつま弾きながら「言葉を書いている」と答えた。そのワーズという響きがユニゾンになったブルースでここちよかった。「それじゃあ、詩人なんだ」と言うとは「まだだけど努力はしています」と言いながらギターを弾き続けた。無口だけど真面目で面影もバーバラに似ていて好感をもてた。彼はその「言葉」を書くために放浪の旅に出かけていると物静かに語った。そして秋になったら今度はオレゴンのポートランドへ行くつもりだと言う。僕は詩なんか書けないから写真を撮っていると言うと彼はやっとならギターを弾くのを止めて「far out! (かっこいい!)」とこころもち目を輝かせて秋のオレゴンの美しさを話し出した。「すごく遠いね。どのくらいかかるの」と聞いてみたらヒッチハイクだから何日かかるかわからないけど4、5日を予定していると言う。あのとき僕は何か彼が羨ましく思えた。ア

## MY TRIP 02

A photographer, Akira Kobayashi longed for Beatnik, and went over to America in the late 1960s. He took specifically monochrome pictures of people and scenery while he was wandering about almost whole area in America. What led a young man to this journey?

アメリカ人の自由さ加減に、アメリカにはアメリカ人の歌があり、詩人の詩がある。結局バーバラが帰る前にラルフをトパンガキャニオンまで車で送ることになった。

海沿いのP.C.H (パシフィックコーストハイウェイ)を走り出すとクリアに見渡せてきもちがいい。夢想家アボット・キニーの夢の跡ヴェニスビーチ、朽ち果てたP.O.Pの棧橋の向こう側のサンタモニカビアー、1970年の狂った夏も終わろうとしていた。

いつもよりはっきりと見えるサンタモニカ山脈の緩やかな稜線と太平洋の水平線に交じりあう辺りに27号線であるキャニオンロードの入口がある。いくつもの谷を越えた山中にトパンガキャニオンはある。トパンガキャニオンと言っても町があるわけではなく原生林の雑木林の中に点々と小さなボロ屋があるだけだったので驚いた。平らなところはほとんどな

い。山の中の傾斜地にそれぞれ小さな家を建てている。そのセンターマーケットは切り開いたわずかな平らな土地に郵便局兼雑貨食料品、生活に必要な最少限度なものは何でもそろっていた。店の前ではコミュニケーションのミュージシャンがフォークロックを演奏していた。そこが唯一のコミュニケーションの場になっているようだった。その日はそこでラルフを降ろして僕はP.C.Hに戻っていつものようにマリブビーチに向かった。

トパンガキャニオンはロスアンゼルス市の西のサンタモニカ山脈の海側の端から海側にあるマリブまでの山岳地帯で、パシフィックパリエイドと北側のトパンガキャニオンの2つに分かれている。その頃は8000人位の人口のほとんどが北側に住んでいた。トパンガという名前はネイティブアメリカンの言葉だ。1839年頃、ヨーロッパの人々が移住してきた

後、1920年にはハリウッドスターの週末用の簡単なコテージができれば始める。1960年頃になるとトパンガキャニオンに吸い寄せられるように若いアーティストたちが住みだした。例えばニール・ヤングもそうだった。大ヒットした“アフター・ザ・ゴールド・ラッシュ”が発売された後には多くの有名無名のミュージシャンが訪れて芸術活動の場になっていた。

その後何日かしてラルフに会いたくなって再びトパンガを訪れた。友人のキャビンのそばにハンモックをぶら下げただけの場所で野宿していると聞いていたのでその辺を探し、雑木林の中をウロウロするが見当たらず迷子になってしまいそうになっていると、突然に何処ともなく現れたラルフにびびりした。彼もそうとうびびりしたようだった。ヴィレッジセンターで買った土産のアップルパイと缶ビールで乾杯

し、お互いに再会を喜んだ。その後彼の友人のキャビンの中に案内されたがすごく小さい掘っ建て小屋だ。レコードプレーヤーがターンテーブルに針を落としたまま止まっている。風に吹かれたジョン・パエズの時間が止まったままのLPがやけに印象的だった。そこにはヴェニスビーチとは違う確かな風が吹いていた。

それ以来僕はヴェニスビーチの海に飽きるとトパンガの山に行くことになった。ビートニックを引きずっていた僕はヒッピーにはなりきれず自分が一体何を求めているのか、それを自問自答しながらの旅が続き、ただ答えを探すために走り続けた。僕にとってアメリカはすぐ目の前のように見えて実はいつまでたっても遠い存在だった。それを認めたくなくていつか同化できることを描きながらシャッターを切る旅を続けていたのだろうかと思う。⑥

1: キャニオンセンターマーケット前のローカルバンド。2: 小さな独立小屋が谷間に点在していた。3: バーバラの家でギターを弾くラルフ。4: テントで水を飲む。5: トパンガキャニオンの小屋の中。6: 後部座席の男とバーバラとサマンサ。7: トパンガキャニオン小屋のJOAN BAEZ "Farwell Angelina" 1965

こばやし・あきら

写真家。1940年東京生まれ。1960年代、ビートニクスに憧れアメリカへ渡る。旅をしながら当時のアメリカ社会をフィルムに記録する。以後、パシフィックカルチャー全盛期のロンドンで活躍し日本へ、コマージュナル、雑誌と幅広く活躍する「P.O.P」など著作も多数